講義年月日　2007 年 1 月 15 日
講演者　加藤　好郎氏（慶應義塾大学国際センター事務長）
テーマ　ケースメソッドを用いた図書館教育の有効性
講義内容

１．図書館・情報学教育の特徴
- 理論と実践が緊密に関連
- 実践的経験による知識の集積⇒一般理論の形成
- 実務において高度な問題処理能力を育成・養成

⇒ケースメソッドを用いた教育が有効

２．ケーススタディーの歴史
- 1950 年代初期　Kenneth R. Shaffer（シモンズカレッジ図書館学科）が 4 編のケースを出版
- 1968 年　Mildred H. Lowell（インディアナ大学図書館学大学院）がケーススメソッドの集大成を出版
- 1994 年　パブリックサービス研究分科会「大学図書館業務ケース・スタディー集」作成
  ⇒Shaffer 及び Lowell の翻訳＋オリジナルのケーススタディー

３．ケーススタディーの類別
① リサーチケーススタディー
一般的原則や法則を導き出す調査研究方法
② インストラクションケーススタディー
a. 規範的なケーススタディー
実践の優れた模範を提供し、一般的原則を説明する方法
⇒教育方法として確立していない
b. プロブレムケーススタディー
問題解決を主たる目的とする方法
⇒教育方法として確立

４．ケースメソッドとは
20 世紀初頭にハーバード大学ビジネスグループにて開発された教育方法
ディベートと異なり、優位論・劣位論が存在せず、多様な能力を持つ個人がディスカッションを通じて新たな解決を創造する「コラボレーション」
- ケーススタディを用いた教育方法がケースメソッド
- ケーススタディーとは一般的にはプロブレムケーススタディーのこと

５．ケースの分析過程
① ケースの一読⇒問題を把握する
② ケースの数回リーディング⇒解決のための感覚や勘を養う

③ 登場人物・相互関係・付録事項・重要な要因・要素⇒ノート（注釈））を取る

④ 問題、課題、論点⇒リストアップする

・ リストアップの類別

「達成すべき問題」

登場人物から委託されたコンサルトとして課題を達成

「調査研究すべき論点・領域」

必要に応じて文献調査を行い、多様な観点から課題を検討

「解決すべき問題」

問題解決のための 9 ステップ

ステップ１：中心となる問題のステートメント

ステップ 2：事実（状況）のステートメント

ステップ 3：「一群」の問題（ステップ１以外の問題）のリストアップ

ステップ 4：選択対象になる行動手段のステートメント

ステップ５：選択対象になる行動手段の利点と欠点の確認

ステップ６：最善の選択対象の選定となぜそれが最善なのかについてのステートメント

ステップ７：フォロースルー

ステップ８：「一群」の問題の討議

ステップ９：ドキュメンテーション

６．実施方法

① グループ毎にサンプルを取る方法

② 段階的に結論を導く方法

７．今後のケースメソッドの方向性について

・ 図書館現場における問題解決能力の向上に役に立つことは確認済

・ 問題点としては、

「適切なケースが不足している」

「熟達したインストラクターが少ない」

「日本の図書館（員）のレベルが低いためケースメソッドを必要としない」

ケースタディ「日曜開館と開館時間延長について」

１．事前に設定した３グループに分かれてから個人研究の発表を行い、各グループとしての統一した回答をまとめる

２．各グループの発表内容

● １グループ

（検討結果）両方ともやらない。

- ２グループ
  （検討結果）時間延長だけをする。
- ３グループ
  （検討結果）時間延長だけをする。
- クラス全体の回答について
  １グループを説得し「開館時間延長」は折衷案として３０分の延長とする。